

基本仮説「健全なシステムは循環（circulation）機能が働いている」を検証する

コース・専攻： 生活環境コース 29 期

グループ名： 循環（Circulation）

メンバー： 徐美子 隅田剛弘 津田勝久 林祐介 八尾芳樹

近年、世界各地で環境問題への取り組みが進められるなか、「循環型社会」という概念が重要なキーワードとして注目されています。また、大阪万博の日本館のテーマも「循環」に決定され、その意義が改めて問われています。

「循環型社会」とは、限りある資源を効率的に活用するとともに、それらを循環的に利用（リサイクルなど）し、持続可能な形で再利用していく社会のあり方を指します。しかし、この表現には、さらに幅広い意味が込められることもあります。また、「循環」という言葉自体にも、「巡り巡って再び元の場所へ還ること。そして、それを繰り返すこと」という定義を超えた多様な解釈が含まれています。

本研究では、エコロジーや経済循環にとどまらず、宇宙〔太陽系〕システム、地球〔エコロジー〕システム、社会〔経済・農業・他〕システム、人間〔身体・パーソナリティ〕システムといったさまざまなシステムが健全であるためには、それぞれに「循環機能」が働いているのではないかという仮説を立て、その具体像を明らかにし、考察することを目的としました。システムとはエコロジーを例に挙げるならば、動物、植物、微生物、非生物といった相互に作用する要素の集まりである。本研究では、これら要素による 38 の循環サイクルを浮き彫りにし、それを「循環図鑑」としてまとめました。

そして研究の結論として、以下のような結論に至りました。

1. 日本人にとって「循環思想」は文化的に親和性が高い。
2. 循環が保たれているシステムは健全で、過度な活動や過小な活動、不均衡、汚染や蓄積、外的要因による破壊などが生じる場合、そのシステムは不健全となり、持続可能性を損なう場合がある。
3. 環境倫理や環境哲学は、どのシステムの健全性を優先的に考えるかによってその立場や方向性が異なってくる。
4. 各システムにおける循環は、互いに関連し合い、影響を及ぼしながら成り立っている。つまり、単独ではなく、多層的かつ相互依存的な存在である。

最後に、複雑化する現代の課題に対処するための提言を以下のようにまとめました。

環境問題をはじめとする多面的な課題に取り組む際には、「原因と結果」という直線的な因果関係に基づく還元主義的な思考だけでは不十分です。むしろ、関連するすべての要素を「円環的な因果関係」として捉えるシステム思考が不可欠です。そして、その中に隠されている、あるいは無意識のうちに作用している循環的サイクルを見極め、それを踏まえた上で適切に対処する姿勢が求められます。